明烏箕七編

へ13
2909
22

能登屋文庫

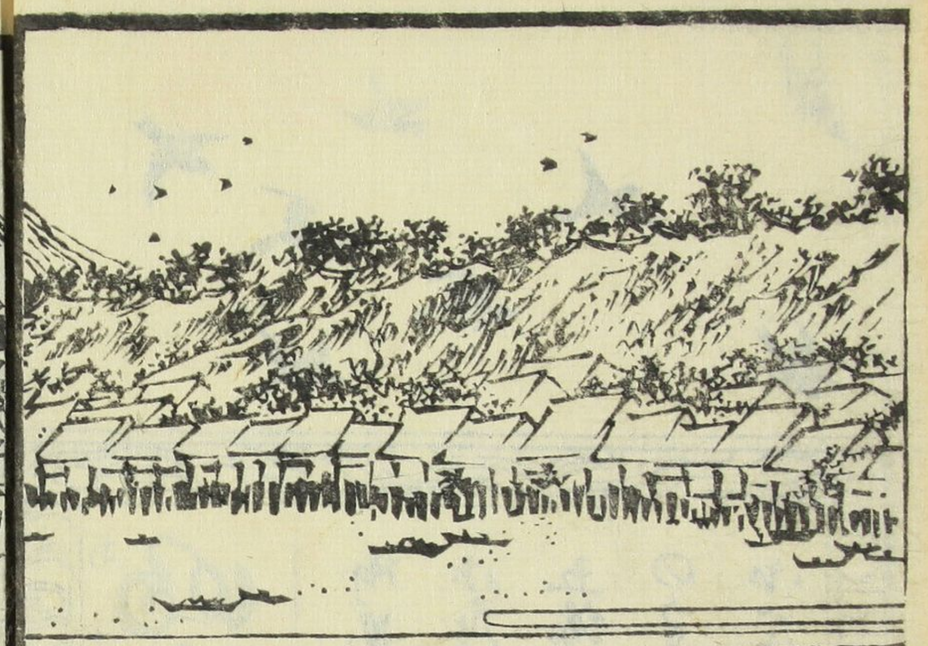
鳥獨二編（あけうらうどくにへん）

時見物さまがらとうまちがらつよ
ひとなるあくとどもはいかにとも全本
五編ろうろうに六編月ありハ乾坤
のうろうと物語ものハ其ものいく
はいいつ預上ハ

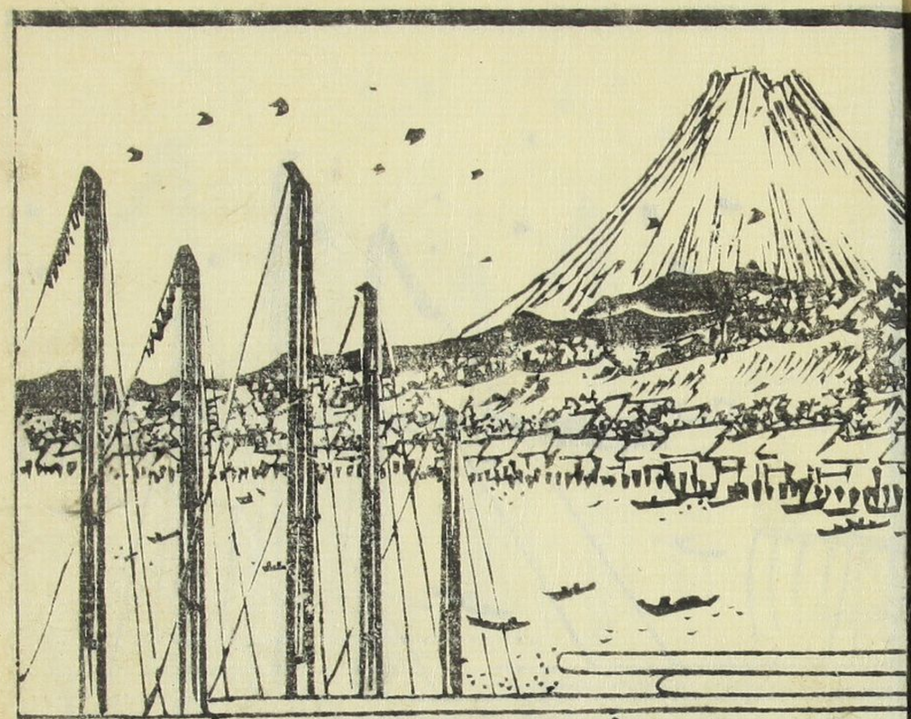
敬元

門へ13
號2909
卷22

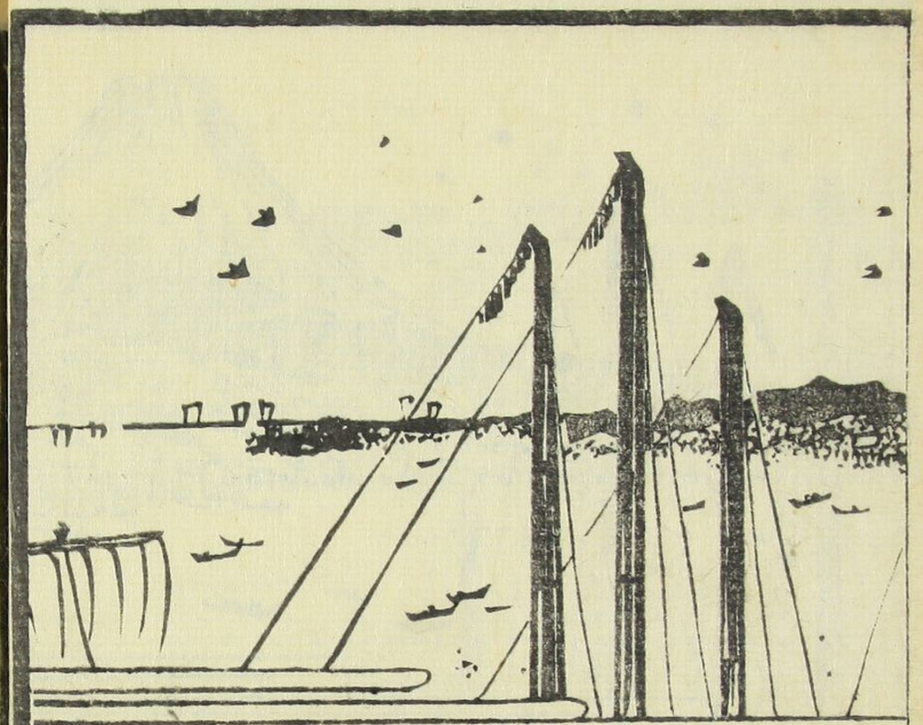
昭和九年
七月二一日
購求



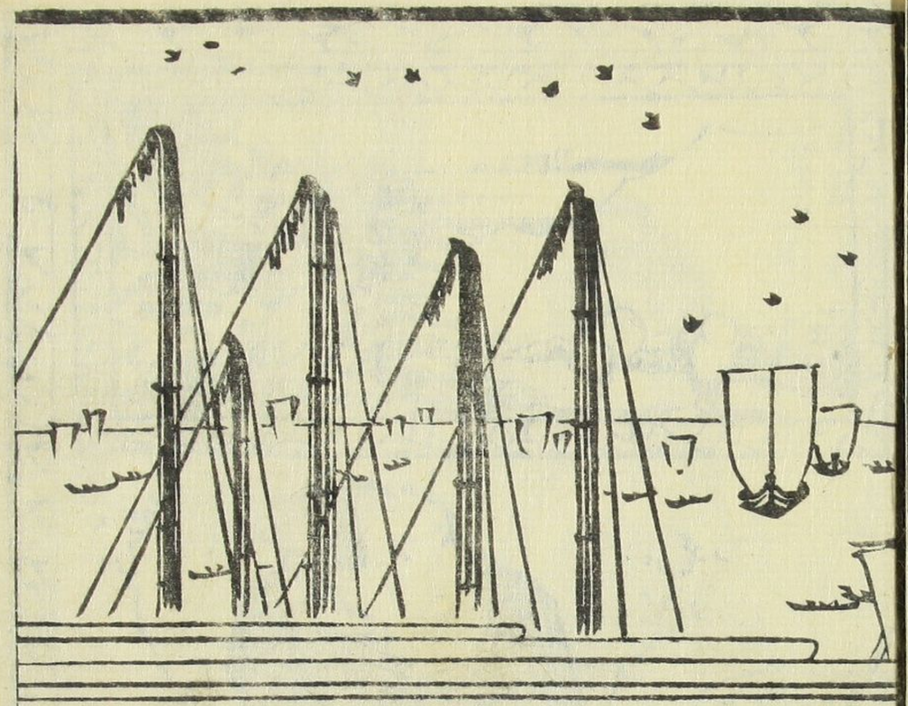
[illegible]の風雅の義風雅[illegible]
[illegible]客は穂[illegible]里[illegible]の
五老井の許子六が
大名乃[illegible]間[illegible]も孫[illegible]
[illegible]客[illegible]なと。雲[illegible]
[illegible]は[illegible]
[illegible]人乃[illegible]月[illegible]
[illegible]生[illegible]



蹈[illegible]桔[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]



伊達小袖よ寄場諸場
の嶋好ものもつ仕立
ものは屋ハ何町連の
江の屋ものもで可出
絵をさせく新蔦小
出るて新あれば恵び
子ハ旗高周出めく
おくまひの外ハ限



者と　ありさまハ
眼ものもく出ハ歌松
さるは通雪の上ひもも
強ものくてどびるくに
も松を集寸屋物も
ものの和屋新ハ一ッ小くて
其方屋るもも天地
面くるる実ものもの屋

の逢縁ゝ心ひろん登きバ乃ち世ゝ中乃
長刺さ毎おりゝ刺梨

文亭綾麿が
後日記潤書

該情を綴りゝ巻中ふちゝみ安ゝ假用ゝ
沼く吾師の筆ゝ助るのゝ

南仙笑門人
爰満人

明鳥後傳寝覚繰言巻之四

江戸　南仙笑楚満人作

第　回

良病ハ国を醫ゝ良医ハ人を医ゝと実ゝ哉田斐
の徳本ハ普く四方ゝ漫遊ゝく癒病ゝかくまゝらゝ
世ゝ治ゝぐゝ死難病を癒ゝ廣く人を救ゝ事。
折ゝも山名屋の浦里ハ奇病ゝよろゝく徳本の廓へ
来ゝるゝを待ゝく待ゝて廻治を乞ゝて徳本

つらく浦里が体所なるを見るに。こは全く一種の病なれば。草根木皮のおよぶ所にあらざるを打捨おくべき。少しても一命をうるよりけだし茶を与へるを及ぶ。さるにそのあるを流んよりは天機をのがれるを似くおそれあり。兵法修行ふかくとも治る時いとらばものづから治をべし。汝ホ必ど案ぎるうろたへてとくさるべくは癒治をとへど更に肯と世ず。まことに顆く然として絶れくて打捨おきぬ。爰に

春日屋の時之助はるつる夜女房お光が魂の廓までを追ひよ来りしを見て世の女子の犯命をおそれきはみなしと思ひ分くるまく。其後は浦里が方へもいらぎ来ぶが岡の別座なのみ門にのりく居るけれども。お光も時之助が為の上をあんじ来ふ来り。そのつまくをうぐさるけれど。時々ハ却くとまを憂るおもひ。ろくくよ物をもいそび。夫婦の名ハありるづく。兵衛のごく睦一

かゝぢ。角よ角世をいとへあり く。活業も物うく。
一トまづ京橋こうり大和めぐり せんとうねて氣の合ー
俳優晋我部間里八ろんど一両輩ふく 酒落ゐづら。
いそがぬ旅路よちゆもきけ る 新く時ゝ次が下駄新川もうち
まで。おとろうさんとうもくひ。とれも大家の家内とあがしく年
のところ四十 過き女とゆまぎ十七八ぞろうもきやとんめらあんなきかゆ男
四大づまもく 浅草ーのうー湯浜おうのたびとんつくさなできそすもおく
行ぎ彼の母とおがき女とゆハ。ものもあとひのやーうーすぞうつきれん
かこうのよ時ゝ次ゝトゆ晋我里八ホ 晋我 一三と且行アノ一トゆとハ
とまとそそうちし。時ゝゆうひ
うつくーいのんぐれ 年増の方ハ大和屋 新造ハ浜と

きゝ来ゝくゆきとね。どゆもとそくらまとねゝぬゝく 異人
和尚ゝ年よ不景ものうくやゝうまゝの藤ハ
五文の茶を 賣ま一ばいひ 時ゝ一けのハ社天氣ゝ
ねゝうゝこんよ天氣ゝ日ハ旅もいくゞ雨でもうると
いゝねへせ。何でも江の島湯倉うゝ 箱根の湯治
ぐらひぶ ものきみ ゆやうゝ最上ゝコウあの女連
江の島ゝゝひるゆのゝ おもゝ 伊勢ゝこんゝるゝ
ゆイとゝゝこゝゆんゝよのゝゝゆ あるゆへ。何でも

アノ娘ゝようがど美しいの　里「左様さ〳〵
とう仰くいる所を見へば。繼子でもあるめえ。
貸さうなもんどうつくしいとゆめごうら。
そまでうちの親子のようみる見へるが先行うら
見へくいる所。どのも空の親子じゃねへ見えな
のが遠いもんごう。あんまりあいゝめごうら
その見へるのサ。アノ年頃ゝどもの〳〵生〳〵　時
年頃もいくが親遠が人病といひ所殺といひ

うちがるところがどのもいへね　晋「アノ爺田を
ごうせるもあるごろね。子供を忌しい
せわく所よ髪でもあまびそとふ不簡
けまど　時　里「男でも坊ごけ。五分の紙ごろう
里「そんなわんくいのるもねへ女郎元がえ
そふいの世。癪人のうちじゃりうち坊さが
いくと　晋「おまゝゃが見をを癪人の紙よいを
ゃがる。チョッいへまいの。ちく所よ髪ごうの。

男ぶりもよろしいのといふ奴。只の女でござせうス。
何でも一ちぢん面組ぐるひをさるけうをや。その
果てといふものは志ませんそまでごろ〳〵新造子ハ
ヨてこしらへ物ごといふそこで年場の後の
おるやつぐるけまぶりまこ〳〵ホがそこけふふ
あひやせん。あの年場をんぞのようなやつも私が
きつうと縋つけるこそまこ大分とあるこちら
だて時「むうんでぞやまそのうまくいろねへて和尚

きんぞのそるがいつでも半分ハ茶くいゝこと
いふのぞ。むうふあやうまるまれへでも。とちがいで
茶くいるのぞうゝ。ゝゝいやう半分茶くこうふま
のこゝ。晋「ごふもうねへ。その易くされこ
のでも祇へストまるゝ祇へくふまこ祇へのうのへまこう産へ
あぐり新聞屋の時「コウぞのうゝ生へ
きてきこうゝ
だうあんちきる物特ふ酒もさめくゝ物
やうゝぞや祇へう里「モシモウ七ツ頃ぐどざりやま

せ。爰ハ早ぐ行まゝごろと 神奈川まで行くとせん
ぜ 時「何もいそぐ 後じゃやあ〜 茶ハ酒
のゝ京都まで五十三次五十三ごまり 酒ろ〜とあへば
ひづう〜の変ハねへ。マア〜 呑う〜 ト 先ハ
晋我里へ せんろくの後ようづひそ 送り 時「コウ 和尚とも
酒さうみとあつらへ酒肴とうり ゝゝ
らぶん安くし。 酒肴を出 くいるごろ〜の
晋「ヨマア 芦原の 松田屋のを引 て 爰ハ 近辺へ
隠居して 風流三昧ぐ いるとゆ〜いうるでござり

ゆるね 時「そんサそのの連様よ。とまた〜大阪河原
へ行屋の左り側の二階造りの立派な家がそこ。
久〜ぶり〜一盃呑合てへのご。人を頼んでや
ろう。イヤ〜 行まあ。何と 苦労ゆぐら 和尚使
者よいつ〜連まて来 晋「アイ 行く
来や〜やう。是非〜 髪場自の 家りの 很ぐ。
時「そんなら〜 ゆる外 〜ろうが。どのぐ 往〜 〜ぐ せへ
晋「アイ〜ト 爰のうちあくたきの 時 里八
と相人よ酒をの 行へあとでご〜く 酒

ふきるをあけく入来らへさのぎれ的ゆきり 下女「あうまこさるる
まりゝ女達の乃女時こゆるもひ
ちと 上一お願ひがどざりまゝて兼ぐまゝこ私どもの
お眼さるがあるる乃廣ぐ目をおひきつけうされ
まゝく。お医者さるを呼びまする間も待遠の
どざりまる。乃新造さるのおつしやりまるあふ。
注あるまこぐこの乃連さるの内よお医者さるがど
ざりまるとあるまゝぐ。どのぐつまる乃見也
ゆきつくゝこざさりまる。夏がありまるあろ。お

願ひまて見そゝまるろ時一ハテ之ふお親
の毒ま。ほゝ一ぶ連の坊さるハ医者じやうまれ。
家近ぐどざりまるが今近ぶまで往やゝこ保
居こぶが医者で祈へゝ役あふくきとこハテ
こまつこのごろて之ゝ一ぶ所よ去るお
屋敷ゝ裁のこ廣あやア奇妙る業がありまる
が。之をあげやきやゝ。何よゝても授こ之ふお
あまりうきろどろのトト何の無紀ゆまるゝ之をのつら墓紙義
をたづきゝどろのを密へいろゝ私ば

さんせんの女中達大きなるゆく時「どれあんみさのまー。吳公
座をもおきて居るありさま
四女中をつれてきまーしまー遠慮無いこーまー
たゞアしハ医者でハござりませぬニ。差よりこーゞ
奇妙なる御系ござりますゞこをもあげるさ
きゝく医賢でーまの世　母「ハイ〳〵医師切なるこの
ござりますト呑せるとこをひきつけることなるゝ
時「アモシ〳〵そまでハのきませぬとふるさりま
〳〵不孝なるゞらこをこーゞ御呑せやてあげま

愛うろ　母「ハイ〳〵ろうしく御預ひやます　時「どれあん
みさのまート御あゞ傷ようろ呑せてとせまごきろしくとぼを
ごを口ろ〳〵にのませ此を一ト口又口ろ口へのまこまゞ　母「アシ
ものるゆく始めのきをゆくへせーとんへく
トのようなる母ハ　母「ありゞこまごどります。漸く氣ゞ
つきます〳〵こと見へます。絨よ四深切四礼の中祈
もござりませぬ　時「何サ御へ是式の真よ礼ゞ
入るめでござりまるゝ。旅ハ為運と申ろ。さゞ
御づひゞござりせう。何ごまるこ四用がある

あるいはまたあるくちゃいまし茶をあげまもうしうしまた又おとりまもうしまらおあがりませ。
ハイさようなら　母「とまたハモウあつい熱のごぎりまして
ト　時「コウ陸ざーきのぐさうきの
時分に成たのかへらう
女中づれよ。おまたがいつくロうしうしまた丸茶を呑
せくしまうしう氣がつのく目をひらいく完全を
笑つくぐどぐぐ　里「エアノ美しい娘よ口うしまま
茶をのませてエイやといつハ大変ぐ　時「エおしまま

氣よろうさ今夜爰へまいりく女郎でも買ふ何ふ去
てもさうく最ちうと酒を流ひせうふト又ッこの無のぐらうちも
ふ雅のる数の多の
抱る　里「コウとうちゃアいのも言分ハ去ねくぐ外の座敷
だろう　里「ハイお濃のお女中連のお客さまうしうひ
ものでぐぎりますぐ今ハ大きふあるり雅のぐぎり外
ぐふも途中ぐおれのいくーようもぐぎりまをイうら
おつおあがりるきまをまるせ。おつげさるで娘もお完ま
ゆうのぐぎりまをとおつーやいまーこ　時「こまハぐふ

おれで痛入ります。よろ〳〵くとやくそくでせへ。コレ里
八ちろと渡たつちやう湯の産家へ礼よいつく来くんで
せへ　里　アイ肝仙の口うつしの時ハ自分ぐいつて礼の
時ハやうにとてをあるわさ嬉ないのぐ。モウ一遍目を
まつとしてうをして笑まうんと表へおどけまづるとよこうり産婦
おりり立返り　里　奇妙〳〵と言ばやう又呑まをゆたりつも
うつり今夜ハ爰へ泊り義者でもあげく接びやうや
モウ神奈川までいくのぐ不ふるつこと。お口裏をとへく

呑うのとちやうやう　時　そよう何でも行あるうだつこと
共よ泊るるよ馬や駕よのつくいちぐ程るもを途
時よモウ和尚ハうへりそふるものぐ深柳ハ尚寺ぐろ
ちらんトいふ近へ貴我ハ深柳蔵そ　音　モシ〳〵大そうるものを
いつけ言対ぐれ。モシ深柳さんぐ尚寺ぐおろへりを待く居
もう〳〵ころら大きゐ遅くるり中くと門宝ものおまへ
さんよろ〳〵くと。お言得でぐり中〳〵　深柳　イヤ時
さんをの浸ハ向おくへまつて四目ろうるを世界。今

度ハどよいのは湯向でござりまし 時「アイサ どのも世
るのこともうるさくてくねくねつまらぬ者〳〵
三味線と者ふと言つくもつけ申〳〵さのサ 詠「そまハ
お美しいるぐ 時「アア何ハこもあまくしぐりで一ツ上
やあそう 詠「そまハあてり紙のごぎり申ス ト 列の長流の名の沿ふ時をうる子
時「コウ其下が居ねへうち珍説ぐあり申〳〵 音「ハテ子
どんるるぐ子 時「との者の妻ハ陽注委ろ〳〵来くこの
だぐ。陽よりるのがそとろ〳〵跡よりもそよりまくる

カノうつくしの年頃と彩造のむまぐ。あの眼ぐ痕で
目をうなぎとといのぐ。医者をよびよ申つぐ間ま
合ねへ〳〵立を医者ぐとおりて一すまてくまろと
女をつくひよとこ〳〵ハテとまつくさのでござり
ます。あまハ医者でハどぎて ません宗道ぐ。私ぐ
お屋敷へいつくでいこ茶ぐありまをろ〳〵あげ申ス。
茶をあり川て陽の屋敷へいつくもと大騒こそと
で茶を呑せうと者ふぐ。歯を食いちぐろて茶ぐ

通ってねへうゝ妄樓おまごっら娘の咽へうゝ
呑せたら氣がつのく。目をかつちりとあのく暗
そのまゝ完尓と笑くこぶどのごそれよといつくひ蚤
の物をよとしくこのご 晋「エ。ちのやうわんとよろへ 時「娘の
壺をいのの〻屋紙のうくまのとまこぶらのごひ
てんきろ〜 晋「ドーく〻ト驚ごをるるがど遠ひみ
だ。モウいくとんく脊中をさまうく安りく居
よのまどぶ。ま〻潜〜いるものをあこ。ま〻こ〜ぶ居ふもの

きく〻医者でどぎりますといろく娘の後のあこり
うゝぶろとあでおろくそれりと拭前のまれく。
よくしてあるんま残念何を医者でハるいるぶくい
ねへでするのるごろう。屋角どのま且那さんの
ぶのさあくげをあこぶるわんとまるて。 そのいろ
ていとのら岩今宗近ごとハやまくこぶ実ハ医者で
ごぎります。医者ハいやぶ 里「薬袋を持ねとりの
潜「ごろの 時「おきやるま。ハくく 藤「そまごやる

もうのでこゝらいかゞでしらう。へゝ先生は紙鳶作ごとおつゝ
あやりまゝたゞ実に医者さんでいらゝまゝ。こゝち。
医者と紙鳶作とそんなに遠くこゝろけるとどうも無
宗匠のちがひでどざります 時「ハヽヽヽ」時「マア、く
呑がいゝ。コウとそれも今夜は後どまりゞ。時御さんも
おつきあ合ませへ 時「之まはありがとうどざります」時「モシ
豆日ふつたら
えゝぶりゞ降ましたゝ
でゝあやゝやう。ゝんまあげこのものがあるこうけト 時 御
おまはいかゝ川端の組よりまり。芸者お郎ライゝ。ことよびくこゝたきゝ
あまはちゝすとこゝりの女中ゞまて
ちりの家よりまりとゝんへくこゝるよあすも

匂ひあちらゝを 三月三日の夕ぐれ 文真後継ぎ偽ゝで 三月橋町の南仙矢楚藩人と横山町の
両の体を一変ゝて 郷潜行
集といふものをあつめく月並同様の集冊をあつめた
つゝりは遠くゝ匂がありまろくモウ余程あるゝら。
遊いうちよ変ゝやゞそふゞどもちろとまぐ
さみよおゝ泳るとうてあるゝんませへ 時「まはあるゝゞ
おりゝこのどゞて まゝやうト 四方のものがゝりきとるうちちゝ

なりけり

第四

扨も彼の女中連の人もを奢りする者ぞとしのよ。
とまで吾妻ようくまでうれし大商人よ。利倉屋市兵衛つ
こいのものく家内まり。這市左つい原茶ハ丁雑うり
勤〳〵番頭ありしぶ先の市左ハ死去とく後妻お
菊ひまぐこ十ようくすぐ浪お稽とりくるもけとこ
ちうよこッまりけまぶ家をつぐべき者なけまバ祝

類おくりて相続のうへ。りつそのこ きゝぬ人を入よ
よせこうりく番頭何ぐ〳〵ハ子飼うりつとわく商業の
道ハうゝこ〳〵陸ふと実体なる産まるまぶこて。
お茶ふもこのよゝをいのよ茶も角も返答けまバ。ま
ぐる店の茶屋ふゝ番頭を二代目の市兵衛つにゝて。
よ妻合せ。利倉屋の家をたてさせけるに。ひ市兵衛つ
陸ふと如ぐる紀ふとふゝく意場のうけもくく。
次第に家業も繁昌して昔よりさる身代とこそ

ありよけるを実や思ふに男業の外とおもらんいろまる病
世の因果ゆや娘も福成長をるにあさごひ。うつくしき
をとこ
るみをあざむくごとく姿の。祖父げるんをこころ
苦にいろ〳〵養父市左衛門ハ乃ゑ〳〵ぬるまぐら恋ひ
をうけ。人のむをぶんるのロおく〳〵傳ての人をに折ハ
ありにあまてく戯言をどいひ〳〵うど。お福ものたゞめ
の狂ハ心もつぐくありし〳〵次第ゑ年をとり五業
もゆづるにつきて。父の祖何とおらあや〳〵こころを

つくをぶ全く我ゑ心あり。て抱ひとらゑ胸つぶを
恋何ふせんとときをうくきを男ひ日づらゑ母ゑ代
をを明てめのがこらば。ゑ婦のうの不和とをる
ことのやと心ひとうにおさめ居をりけるぶ市左衛ハ
ひとふくく猫の犬去をるとぐく。今度祖根の湯ゑ
をを寝ゑ居をくむをる福ををまたいををと。自己ハ力ぎと
二日ゆどをまくゑ〳〵ゑ。ゑ〳〵ゑ。ゑ〳〵ゑ。ゑ〳〵ゑ。ゑ〳〵ゑ。ゑ〳〵ゑ。ゑ〳〵ゑ。ゑ〳〵ゑ。
番何ゑ長ゑゑ待合さんと約束せ〳〵をりけり娘

お福ハうちへかへらんとてミあらんとさうせしへも。
共にもひさしぶりぞさらば行んとハ。暑中見舞のあいさつを
のべてくみしきうちうぎりうけ上げ温飩の一筋ま
思ひせまりくぶそでとこそ涙をおとせしものぞあり
ける。ふく其後ハ利倉屋が家内も爰に泊りあつまれ
ば。お福も大きに悦ぶもぞ。隣座敷の妻なる時こそかゞ方
へ厚く昨日の礼をのべ立出ぬ。時に入相我里八ツも
天氣のよろしき道中もいかゞ又ここと柳にて上

ぞ。扨ぶら〳〵と道〳〵の名所古跡を尋ね。
又ハその所〳〵の風流家を訪ひなどして。京都きよく
登りけるまゝ。きそお㐂利倉屋の妻むすめその次の
夜ハ藤沢泊り翌の夜ハ箱根へつくときくま。
おふくハうれしきみるうちあく。いつぞハ世ハ上々あんじ
煩ひけるぞいとゞしき。いろ〳〵とあんじてすがくても是非
あまりとぞ思ふくどくも。其手とりそずれ名の人来夜
とてもおもねど。きみがちたまひしとてきるのかこいのこと面白とやん
とぞしと思ふかきかるたまるのうちを安きだる子女の事まで
おもしり我身の上のさみしさのと失ふとりの一とまぐしと書きぬを

ゑまとのうちぞ
あれまとまり

一筆 きのと しらしらとまとまぐの
四年目の四月末小滝 深く山 高く
うつくしく 筆ふす 海よ 清くしづく 絵
父きぬ小三郎の頃 うきぬるの日ぞを
四月度ぐり。 四月人 この程 深く 海
その父母の古員を人 ちまち ひハ 綾よ
畜生とよ ちまち ひそんぐ 手頃 ま 帰の

けいかくいさ〜ハ 四方 ぐさ 屋 ぐ ぐ。 と 生 そも
いや〜 き 身ぐんの人 ま 四ぐさいへ。 父母へ 四
祝ぐひゃ上ひとす。 四そもめうとわ ふうぐ 元
人よいくども。 女子の 下ぐび 絵来せ〜 人を 退
て 外のおとの 孤ふ生 ひも。 まこ 女子のみちの
うるひゃさびいう〜 美りいへ。 今 食の 旅を
きのそひと。 その人と ちあ〜 金 途 弁こう
ふ 美 いこ〜ゃひ。 さぐ ぐ〜 父母の 四月 を

かすめいとゞえ。あくまでこそ思へ。いとんが。
とまりとそ。前生とまりの縁来るゆとゞあきら
めゆるゆとゞあくまでこそ。たゞりく。たゞりく
ゆとゞえとまりまのいとゞ名残おくいとゞえ。女の
ゆとゞえとまりうへゞくいとゞ。ゆとゞあくまでこそ
ゆとゞえとて。実ゆに相知まゆさずりくゞ。今歌
を命日とあゞりくめ。一へんのゆとゞ面向ゆゞ
上りくゞ。ゆとゞあやゆとゞ命ゆとゞえとゞ又くゞ見ゆ

変ゆとゞ見ゆ変りゆとゞあるゞくやと楽くゞ
りくゞ。自あくゞゆとゞとてさるゆへ須上ゆとゞ母さるゆ
とゞゆとゞ春ゆとゞりの持ゆとゞちゆとゞくゞ来ゆとゞく
ゆとゞ月ゆとゞてゆとゞ無ゆとゞ結ゆとゞねゞゆとゞひくゞ。ゆとゞ
ゆとゞ上くゞゆとゞるゆとゞゆとゞ滝山ゆとゞくゞゆとゞ添ゆとゞくゞゆとゞ
ゆとゞくゞめゞくゞゆとゞ

母上さゆとゞ
父上さゆとゞ

後り

ト書給りて静らに仕度をこの人。窓よりとび出るを。
家内の者共も走り来て流山よりとび獣の姿
とそこなはんとせしかども。さすがに狐なる故
ゆゑ。なかなか居ずくまりぶるへをくく
かなはずと。何ぞとまうくどり行ぬ。こなたも物の
音を聞て。家内の者共。いそがはしく狐を
もとさまたげんと目さめるに。お福がみへざるゆゑ
水場へでも行ぬるとて。手燭おきくるまと
ぞく来ざるゆゑ。家の人まづ〳〵さぐせどもそうけ
だよりなれば家内の者ども。たゞあきれ。荷物の
かたへ〳〵をみるに。書おなのありけるまぶ。毎ハ胸りひらき
見るに。なるほど。書おなの。お福のありさゆ。お福よりぎりて。
男をこしらへ立退んとのはかりごと。
方へ人を走せくさがし求めけるまど。終よりあくるハ
ちまざりける

寢覚繰言巻之四終